

研究のメインキャンパス

「一関か奥州」明記

宇宙の謎に迫る大型加速器国際リニアコライター（ILC）の誘致を目指す東北ILC準備室（室長・鈴木厚人、副室長・山下了氏）は26日、東北の将来像やインフラ整備に関する官民の役割分担などをまとめた基本計画（マスタープラン）の概要版を公表した。研究のメインキャンパス

準備室が基本計画

は新幹線駅がある一関市か奥州市と明記。商業施設や住居施設、宿泊施設は民間、外国人向けの集合住宅や研究・管理棟、ILC本体施設は行政が整備を担う。同計画の詳細版を含む準備室の活動をまとめた資料を4月に政府や経済団体に示し、ILC実現を要望する。



東北ILC準備室の基本計画の概要版を発表する鈴木厚人氏（左）と山下了氏（26日、仙台市）

官民の役割明確化



鈴木室長、同準備室フェローの山下了東京大素粒子物理国際研究センター特任教授らは同日、仙台市内で記者発表した。

基本計画ではILCの建設から運用までを東北だけでなく日本全体で連携して進めると明記。東北の将来像として東日本大震災からの復興、世界的なイノベーション（技術革新）拠点の形成などを目指すとした。ILC整備に向け民間と行政の役割を明確化。行政が担う外国人向け集合住宅

や宿舎、研究棟、ILC本体施設などでも民間資金の活用による整備（PFI）を積極的に導入する。メインキャンパス内の施設整備の役割も定め、ホテルや宿泊、福利厚生、展示などの施設は民間を活用する。

中核的な地域（コアゾーン）として、盛岡市から仙台市の内陸都市部と、宮古市から仙台市までの港湾も含んだ地域を設定。メインキャンパスや先端産業の集積拠点、東北の食や文化の発信施設、海外との交流拠点などを想定する地域交流機能拠点、部品の検査や組み立て、保管などを行う拠

点も整備する。鈴木室長は「基本計画は準備室の2年間の活動を踏まえた内容。（ILC誘致の）政府判断に向けて、基
本計画を含めた活動実績をまとめた報告書を各官庁や経済団体などに示し、東北で準備が進んでいることを訴えたい」と強調した。